

2021年

アンドレア師のキリスト教美術史講座 受講ノート VII

in 船橋学習センター「ガリラヤ」

from 蕨由美の Facebook



アンドレア師のキリスト教美術史講座

In 船橋学習センター「ガリラヤ」

2021年6月2日

今日は午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」で開催されたアンドレア・レンボ 師の「福音書におけるイエスの復活と美術」の講座を、自宅で ZOOM で受講しました。

福音はマルコの 16 章。近代の考証では、4 つの新約聖書では最も早く成立したとのこと。シンプルで要所のみを先へ先へと急ぐ記述は、初代教会の洗礼を受ける準備中の初心者を対象としていると思えるそうです。

復活の朝の三人の女性のリアルな報告の 16 章 8 節までと、9 節以後とは文体が違って、特に 14~18 節はイエスの信じる者への救済宣言に重きが置かれています。

美術は、東方教会のイコンと、ジョットの 14 世紀初頭の壁画。

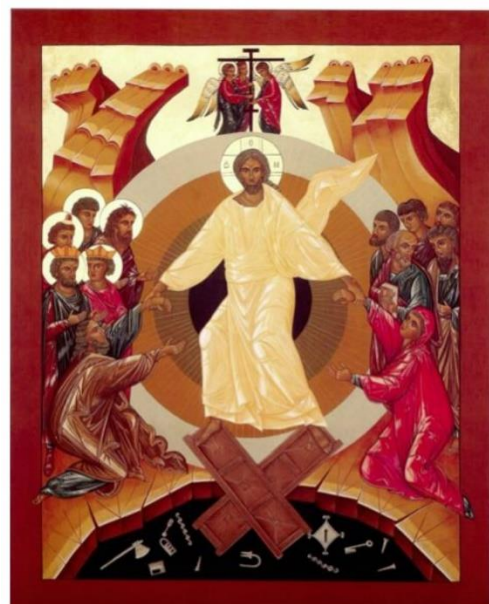
イコン「主の復活の」では、ひざまづくアダムとエバ、左に旧約の聖人、右にペトロと弟子たち、そしてキリストの上には三位一体を意味する三人の天使と、衣をなびかせ復活したイエスの姿は力強い。足の下は黄泉の闇に死刑具などが描かれている。黒から白色に変わる同心円の背景は、闇から光への象徴を表す。

ジョットの絵は、二人の天使が描かれていることから、マタイ伝に基づく。マグダラのマリアに向けられたイエスの右手は拒絶と同時に祝福を与えるしぐさ、左手は勝利の旗を持つ。復活したイエスと天使の白い衣が「ジョットのブルー」の背景に美しく、世の光を印象付けているとのことでした。

今日は、めぐちゃんも PC の前でおとなしくしていました。



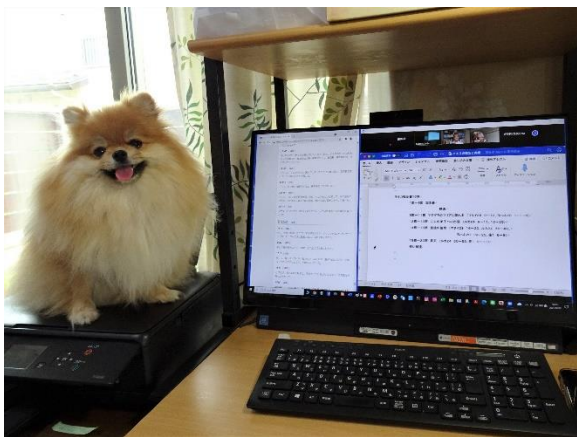
プロジェクター使用している会場の部屋の照明が暗くて、ZOOM では、アンドレア師のお顔がよく見えず残念でした



主の復活



Giotto, 主の復活, 1303-05, フレスコ, 200 x 185 cm, イタリア、パドヴァ。スクロヴェーニ礼拝堂。



画面左側に、「wikisource」の口語訳聖書の参考となる箇所を並べて見ながらだと、わかりやすいです。

2021年6月16日

今日も6/2に引き続き、午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」で開催されたアンドレア・レンボ師の「福音書におけるイエスの復活と美術」の2回目の講座を、自宅でZOOMで受講しました。

今回の福音はマタイの28章で、『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』と天使が告げます。

もはや直接イエスと会えない弟子たちの次世代に向けて、お墓ではなく、ガリラヤ＝日常生活で営まれる共同体の中で復活したイエスに出会うことができるという初代教会のメッセージでした。

前回講座のマルコの福音は、復活を信じない弟子たちに、主が「信じて洗礼を受ける者は救われる」という初心者向けの簡潔な内容。

マタイは、マルコの文章に自らの伝承を加えて深化し、洗礼を受けた信徒がイエスの教えを守ることに主眼を置く。

マタイは、モーゼ5書を範として5つの新しい約束(5・7・10・13・18・25章)を述べ、中でも25章で、社会の端っこに置かれた最も小さくされた人々の中にこそ復活したイエスがおられ、その守るべき教えは、愛の行為であると説く。

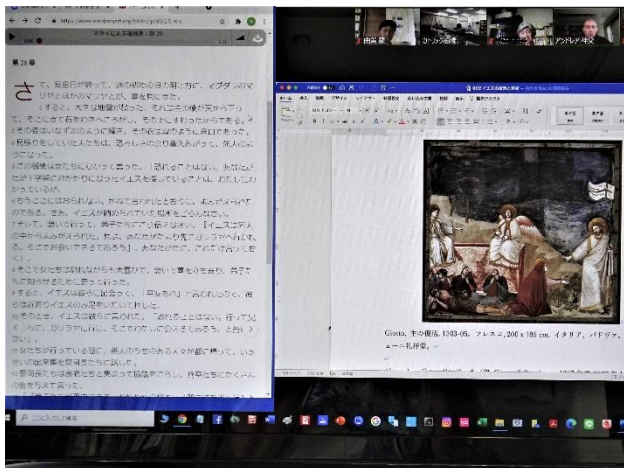
ルカ伝では、典礼のミサのように、エマオで二人の弟子の前でパンを裂く姿に、ヨハネ伝は弟子たちの真ん中に立つ姿に復活した主を記す。

なお、マタイ28章での婦人たちの行く手にイエスが立っていて、「おはよう」と言われるという新共同訳は適切ではない。「おはよう」の元のギリシャ語は「カイエ」、ルカ1-30受胎告知での天使の言葉「恐れるな。神から恵みをいただいているのです。」と同じく、「恵みあれ」＝「カイエ」＝「喜びなさい」という意味が正しく、婦人たちにイエスは「喜びなさい」といわれたのでした。

美術は、前回のジョットの絵の解説。墓石の上に座る白衣の御使いは、14世紀初頭のジョットのころの教会で、聖書を朗読する役目の助祭の姿で、

翼は助祭のストールに似る。復活徹夜祭で復活賛歌を歌い、助祭が聖書の復活箇所を朗読するように、主の復活を宣言しているのだそうです。

もう一枚のピエロ・デラ・フランチェスカの「主の復活」(1463-1465)。婦人たちが墓に来る前、兵士が眠りこけている時に復活する姿を描いているとのこと



ZOOM で受講。聖書を WEB から画面左にアップしておくとう便利です。

これは口語訳 (1955)

28-9 『イエスは彼らに会って、「平安あれ」と言われた』
「おはよう」ではなく「平安あれ」と訳す。



早く、直接お目にかかりたいです。

マタイによる福音書 28

復活する

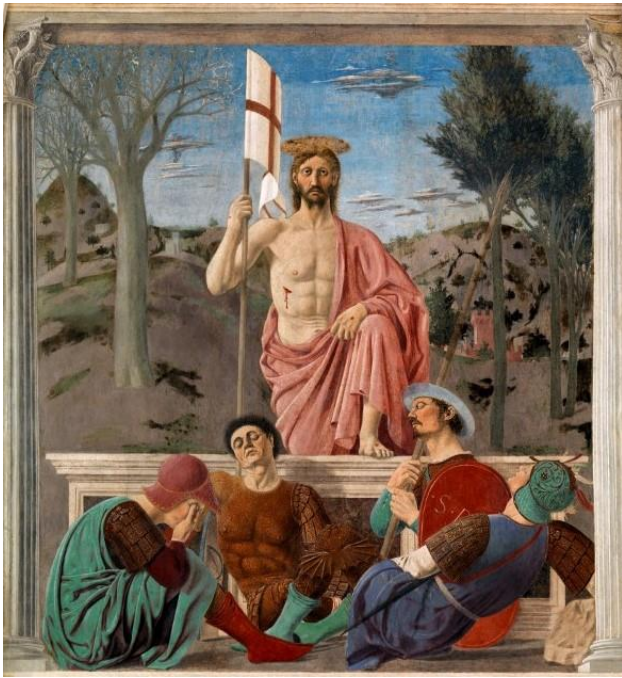
1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。2 すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。3 その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。4 番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。5 天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6 あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7 それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」8 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。9 すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。10 イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

新共同訳のマタイ伝



Giotto, 主の復活, 1303-05. フレスコ, 200 x 185 cm. イタリア、パドヴァ。スクロヴェーニ礼拝堂。

ジョットの「主の復活」



ピエロ・デラ・フランチェスカの「主の復活」(1463-1465)

2021年7月7日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」で開催されたアンドレア・レンボ 師の「福音書におけるイエスの復活と美術」の3回目の講座を、ZOOM で受講しました。

今回は、ルカによる福音書と使徒言行録から。

初心者向けのマルコ伝、共同体づくり最中のマタイ伝の後に書かれたルカ伝では、イエスの教えをさらに外へ向けて発信し、宣教を促す。ルカ福音書と使徒言行録の宛先の「テオフィロさま」とは「神を愛する人」の意で、ギリシャ語を話し、「家庭教会」のような共同体を営んでいたと想定されるそうです。

福音書の主人公がイエスであるのに対して、使徒言行録でのそれは「聖霊」。

聖霊がなければ「教会」ではなく、その働き、神から注がれた力が、パウロの召命、さらに西への宣教となる。聖霊は目に見えないが、その稔りは見ることができる。

マルコ伝では「イエスがガリラヤで待つ」と告げるのは「一人の青年」、マタイは「一人の天使」がイエスの復活を告げる。ルカ伝では、「輝く衣を着た二人の人」が空の墓でイエスの復活を告げ、エマオで「二人の弟子」がパンを裂くしぐさから復活した主と知る体験をする。

ルカ伝で、「複数」なのはプライベートではない共同体の信仰を意味していて、ちなみに、ヨハネ伝では「二人の天使」と書かれているとのことでした。

美術講座では、イコンの基準となった15世紀初頭のA・ルブリョフの「三位一体」。

食卓を囲み、中央にイエス、左に神、右は聖霊。

イエスは神を、神は聖霊を、聖霊は私たちを見つめて立ち上がろうとしている。左後の建物は「教会」、右後ろには外の自然を描く。

もう一枚は、現代のサルバドール・ダリの衝撃的な「三位一体」。

中央のイエスは、ミケランジェロ「最後の審判」

(システーナ礼拝堂)のイエスの姿のモチーフ、左は聖霊、右に女性の姿の慈しみ深い神。

それぞれの顔が見えないのは、第二バチカン公会議以前の旧態然とした当時のスペイン宗教界への「顔も見たくない」ダリの複雑な思いの反映で、ダリの描く神はじっと自分の心を守ろうとしているとのことでした



アンドレイ・ルブリョフ 「三位一体」1411年か、1425年から1427年の間、トレチャコフ美術館、モスクワ



サルバドル・ダリ、「三位一体」、1960。

サルバドル・ダリ。1904年5月11日 - 1989年1月23日。スペイン・フィゲラス出身の画家である。妻は詩人ポール・エリュアールの元妻、ガラ・エリュアール＝ダリ。フルネームはカタルーニャ語でサルバドール・ドメネック・ファリプ・ジャシン・ダリ・イ・ドメネック (Salvador Domènech Felip Jacint Dalí i Domènech)。シュルレアリスムの代表的な作家として知られる。

2021年7月21日

船橋学習センター「ガリラヤ」で開催されたアンドレア・レンボ 師の「福音書におけるイエスの復活と美術」の4回目の講座も、ZOOM で受講しました。

前半は、1～3回までの講座の、マルコ・マタイルカの「共観福音書」における「主の復活」のそれぞれの記述と「復活」の意味の理解を巡ってのお話の復習でした。

マルコ伝では、被洗礼者の姿である白衣の若者が「ガリラヤ(=日常性)の中で、イエスと再会できる」と告げるが、その再会の場面はない。

マタイ伝では、仲間(共同体)づくりに主眼が置かれ、復活したイエスが、婦人たちに「おはよう(正しい訳は、「恵みあるように」)と声をかけ、また弟子たちには洗礼を授けることと宣教活動を通しての復活の体験を示唆される。

ルカ伝では、仲間=教会の活動を支えるのは「聖霊」の働きであり、エマオで出会った弟子は、そのパンを裂くしぐさに復活したイエスと知るが、その「直観」こそ聖霊の力である。

そして今回はいよいよ最後に書かれたヨハネ伝。

ヨハネは、1章冒頭の「初めに言があった」に続けて、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」、5章で「独り子を信じる者は滅びず、永遠の命を得る」と記し、復活とは「永遠の命」であるとの理解を述べている。

4章の井戸の水くみに来たサマリアの女へのイエスの言葉「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」、そして5千人の民衆に「私は命のパン。」「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」といわれる。

また、他の共観福音書には、イエスを埋葬した墓穴を閉めていた大きな石について書いてあるが、ヨハネ伝では石は取り除けられて、墓は開け放たれている。遺体の有無も問題ではなく、永遠の言葉に命があり、イエスを信じることにより神の命

に与り、死んでも生きる。

墓は永遠の命の入り口、体に刻んであるのはこの世の歴史と歩みであり、一人一人の存在として永遠の命の与るのだと、ヨハネ伝を通して、アンドレア師は語られました。

美術の紹介は、ジョットの「主の復活」(1303-05) マグダラのマリアへ差し出されたイエスの手は、触れることを拒みつつ、祝福を与えています。

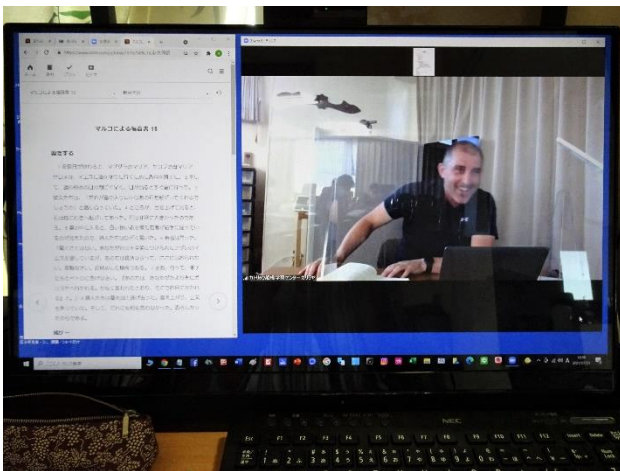
2枚目は、初めて知る 20 世紀イギリスの現代アーティスト、グレアム・ビビアン・サザーランドの作品でした。

背景は労働者用集合住宅、父のところへと登っていくイエスは労働者の姿で、イエスを自分の目で探そうとするマグダラのマリアと一体になろうとしています。階段と手すりの直線の構図は、ギリシャ語のキリストの最初の文字をあらわしているとのこと。



ジョットの「主の復活」(1303-05)

ヨハネ福音書「イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。イエスは言われた。「わたしにすぎりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」



船橋学習センター「ガリラヤ」の講座室からのオンラインでのアンドレア師対面での受講者への感染予防の透明ビニール越しでの熱のこもった講演でした。



グレアム・ビビアン・サザーランド (1903-1980) の Noli Me Tangere (Touch me not)

2021年9月29日

今日は午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア・レンボ師の講座「聖書と美術ーカラヴァッジョによる福音ー」をオンラインで聴講しました。

まずは、旧約聖書で神は偶像崇拜を戒めたが、なぜ美術として表現されるのかということから始められ、ヨハネ1-18章「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示された。」コリント二3章「覆いは取り去られ、鏡のように主の栄光を映し出しながら」、を引き、「イエスという人の姿を通して、神の世界を描くことが可能となり、芸術は神の創造のみわざに協力するものとなった」と述べられました。

本題のミケランジェロ・メリーダ・カラヴァッジョ（通称カラヴァッジョ）について。

彼は1571年9月28日生まれ（戸籍がある時代ではないので、洗礼式の日か？）、そして洗礼名ミケランジェロは、天使ミカエルのことで、今日9月29日は天使（大天使ミカエル・ガブリエル・ラファエル）の祝日。

カラヴァッジョは最初に手掛けた宗教画「エジプトへの逃避途上の休息」（1597年頃）の作品で、真ん中に自らの洗礼名である天使を描いている。左はヨゼフ、右には安らかに眠る聖母子。

天使は12~13歳ぐらいで性別不明、バイオリンを奏でようとしている。その天使に対して楽譜を掲げるヨゼフは疲れ切った足をこすり合わせている。

左下には袋とワイン瓶（砂漠を旅するための水か）、夜が明けかかり、光が左上から天使と聖母子を照らす。マリアの足元には受難を象徴するイバラが。

カラヴァッジョは、生きている日常の人々の姿を描き、その匂いや雰囲気までも伝えている。

難民として旅するこの聖家族は、地中海を小さ

なボートで渡る現代の難民の姿そのものでもある。

最近になって、ヨゼフが掲げる楽譜は15世紀のフランス人の作曲による旧約の「ソロモンの雅歌」であることがわかったそうで、愛の詩の雅歌はまた、神と民の愛の物語でもあるとのこと。



ZOOMで「こんにちは」 アンドレ・レンボ師



カラヴァッジョ「エジプトへの逃避途上の休息」

(1597年頃)

2021年10月13日

今日は午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」まで行き、アンドレア・レンボ師の講座「聖書と美術—カラヴァッジョによる福音—」を受講してきました。(案内では今回はアンドレア師が会場まで来られ、生で聴講可とのことで、久しぶりにお会いして power を頂こうと思っていたのですが、残念ながら急な御用で、会場でのオンライン聴講となりました。また夜も ZOOM での同じ講座があり、復習できました。)

今回のテーマは、カラヴァッジョの「聖マタイの召命」。2016年にローマに旅した際、サン・ルイジ・デイ・フランチャージ教会で実際に見る事ができた思い出の深い作品でした。

「聖マタイの召命」「聖マタイの靈感」「聖マタイの殉教」の三部作の中でも最も有名な絵で、カラヴァッジョにとっては、前回の「エジプトへの避難途上の休息」に次ぐ若い時の作品です。

福音はマタイ9章-9「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。」との劇的な場面ですが、アンドレア師は、マタイは出会ったばかりのイエスの一声に瞬時に従ったわけではなく、イエスと出会ってから逡巡と悩みの過程があった末の召命であったであろうと説く。

イエスの指さす右の手は、ミケランジェロの作品であるピエタのイエスの右手、またシステйна礼拝堂の天井画の神の手で、罪の赦しと共に新しい命の歩みが始まる手である。

マタイ伝9章の前の章は、病気を治し身体を癒されるイエスの記しているが、この9章では、徴税人=当時の罪びとを赦し、心を癒し、新しい命を与えるイエスの姿が述べられている。

この絵のイエスの手前に立ちはだかるのはペトロで、その手はイエスの手と比べて力が入らず迷っているようだ。最近のX線解析によれば、イエス像が描かれた後にペトロ像が描き加えられた

とのことで、当時の教会へのカラヴァッジョの心境があえてこのペトロ像に表現されているとのこと。

また窓は、十字架、そしてキリストのX、4福音家を象徴している。

さて、これまでの美術研究者が議論してきた左の5人の男のだれがマタイかという課題。無垢な少年、血気盛んな青年、そして歳を重ね悩む男達。それぞれの人生の5つのステージを表す5人全てがマタイを、そして私たちの姿を表すとアンドレア師は説く。

その5人がイエスとペトロの時代の服装ではなく、カラヴァッジョの時代のファッションであること、それは現代に生きる姿であり、福音も過去ではなく時代を超えて現代に届けられていることを意味するとのことでした。



『サン・ピエトロのピエタ』(1498年 - 1500年、サン・ピエトロ大聖堂)



システйна礼拝堂 天井画「人間の創造」(1508年—1512年)



2021年10月27日

今日は、午前中船橋学習センター「ガリラヤ」まで行き、アンドレア レンボ師の講座を対面で受講してきました。オンラインでも受講可能だったのですが、生のお声と姿からパワーをいただくことができました。

今回のテーマは、カラヴァッジョの成熟期の作品「聖アンナと聖母子」(1605~6年 ポルゲーゼ美術館)と創世記3章の蛇の誘惑について。

マリアは自分の左足の上に幼子イエスの足を乗せて、蛇の頭を踏みつけ、何かを教えようとする姿は日常生活のワンカットのようです。

創世記の第2章は、人間の創造。ソロモンの平和な時代が反映されていて、神は陶芸家のように土から人を、造園家のように園を造り、園の中央に命の木と、善悪を知る木とを生えさせられ、そして医師のようにあばら骨をとって女を造った。

第3章前半では 園の中央にある禁断の木の実を採って食べるよう誘惑する蛇についての物語。

「賢くなる」との蛇の誘惑に木の実を食べた人は、神のみの力であった判断力・識別力を得るが、善悪の見極めは微妙で難しく、正しい判断ができないと人間関係は壊れる。また自己責任を男は女のせい、女は蛇のせいにする神への人の言い逃れ。このような責任逃れが指導者の場合、分裂を産む。

ヘブライ語で「賢い」という言葉は、「裸である」との意も含む。蛇は脱皮して「裸」になり、そして静かに寄ってくる賢い動きは、まさに危険な「誘惑」である。

第3章後半では、神は蛇に向かって「わたしは恨みをおく、おまえ(=蛇)と女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」と言われ、人をエデンの園から追い出された。

この絵の主題は、蛇の頭を砕こうとするマリアとそれを実現するイエスの存在。マリアの母アンナは、創世記のエバからのつながり(=「女のすえ」)を暗示させます。

カラヴァッジョがこの絵を描いた当時、マリアの服装やイエスの裸姿に、宗教界からは批判が多かったそうで、その批判は、「ロレートの聖母」の絵にも向けられていたとのこと。

「ロレートの聖母」は別名「巡礼者の聖母」。

園を追われた人間は旅人・寄留者となる。(「歴代誌 上」29章-15のダビデの祈りの言葉)ゆえに、私たちは人生の巡礼者なのです。

この絵の解説は、次回のお楽しみということで、講座は終了しました。



カラヴァッジョ「聖アンナと聖母子」

(1605~6年 ポルゲーゼ美術館)



蛇の頭を踏みつけようとするマリアとその上のイエスの足



今日も熱弁のアンドレア師



「ロレートの聖母」については次回のお楽しみに。

2021年11月10日

今日の午前中、船橋学習センター「ガリラヤ」のアンドレア師講座「聖書と美術ーカラヴァッジョによる福音ー」とオンラインで聴講しました。

はじめは、前回のカラヴァッジョ作「聖アンナと聖母子」と創世記3章の蛇の誘惑についての復習。

創世記第3章の失樂園にさいして、神の「女の子孫は蛇の頭を砕く」との言葉は大事な予言で、キリスト教はその「女の子孫」とは人類を原罪から救済するイエスであるとしてきた。なお、アウグスティヌス神学による古い「原罪」の概念は、第二バチカン公会議以降否定的で、創世記1~2章に書かれているように「神の似姿として想像された人間は、根本的に良いもの」との新しい考え方に変わってきているとのこと。

カラヴァッジョ作「聖アンナと聖母子」は、「蛇の頭を砕く女の子孫＝イエス」を描いているが、ルカの1章39-45の従姉妹のエリザベトを訪ねた際のマリアの言葉は、この創世記の「女の子孫」についての神の約束に基づき、またその旅はマリアにとってその言葉を伝える最初の宣教の旅であり、巡礼であった。

次いで、今日のテーマの「ロレートの聖母」について。

古めかしい家の入口の段差の上に立つ聖母、二人の巡礼者が着いたばかりの汚れた姿でひざまずく。マリアはイエスを抱き、イエスは右手で巡礼の夫婦を祝福する。イエスの右手はミケランジェロの創世記の天井画の神の右手と同じ、またイエスを抱くマリアの右手はミケランジェロのピエタ像の右手と同じ形をとる。

光は、左上から神からの光がマリアの顔にさすと同時に、幼子イエスからも発せられ、巡礼者を照らしている。

戸口に立つマリアの髪型や胸の開いた服装、足の組み方など、社会の底辺の女性の姿で、当時の教会が公的に展示し得ない姿に描かれている。カ

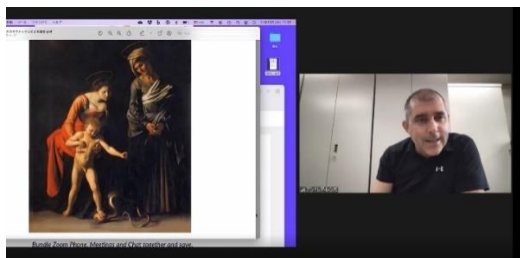
ラヴァッジョは「マタイの召命」と同様に、当時の日常生活の風俗で描くことにより、「現代」にこそ神の救いがあることを示唆している。

老夫婦はアダムとエバであり、このシーンは神が予言した「蛇の頭を砕く女の子孫」を求めた巡礼の旅での出会いであった。

最後に、ロレートは聖家族の家がナザレから運ばれたという伝承の巡礼地、そのこととの関係性について私が質問すると、お答えは、扉の右の壁がレンガ造りで、聖家族の家をあらわすとのことでした。



幼子イエスを抱くマリアの右手、そしてイエスの右手の形に注目！



前回の復習「聖アンナと聖母子」からスタート



ミケランジェロのピエタ像

聖母の右手、イエスの右手の形は・・・



カラヴァッジョの「ロレートの聖母」または「巡礼者の聖母」

1604-1606年作 サンタゴスティーノ教会



パワフルなアンドレア師 次もよろしく

2021年11月24日

ガリラヤのアンドレア師講座「カラヴァッジョによる福音」4回目を、帰宅後、オンラインで視聴しました。

今回は、カラヴァッジョ 16601年の2作品『聖ペトロの磔刑』と聖パウロの『ダマスカスへの途中での回心』。

この1対の絵は、金持ちの依頼を受けて描いた作品で、ローマのサンタマリア・デル・ポポロ教会内の小聖堂にあり、ワンコインを入れると5分間ライティングされるそうです。

ペトロとパウロは共に新約で重要な人物で、ペトロはユダヤ人に、パウロはギリシャ人など異邦人へ宣教を行い、初代教会の基礎を築いた聖人。この絵は2.5mもの高さで、画面いっぱいに人物が等身大で描かれ、「マタイの召命」の絵とは逆に、空きスペースのない円熟期の特徴をもつ。

シモン・ペトロについては、4福音書共に教会の頭として記述されているが、その召命については、マタイ・マルコ・ルカの共観福音書とヨハネに福音書では、異なっている。

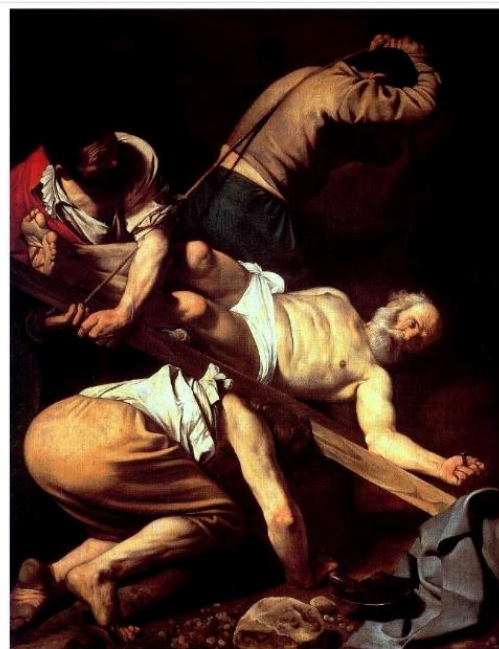
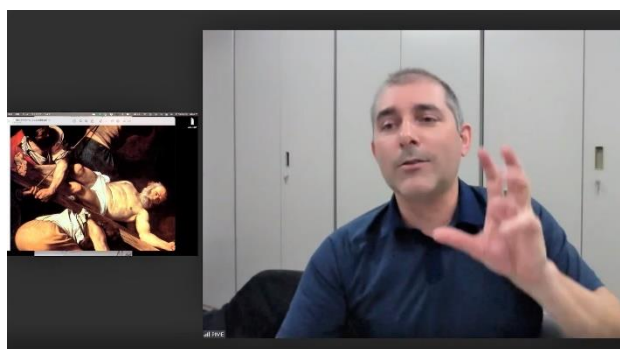
紀元1世紀末、地中海各地とパレスチナに展開していた各教会が一つになろうと結束していく中で、福音書も編纂されていくが、小さな教会であるヨハネ共同体は、大きな教会群に対して、独自のアイデンティティを存続させていく。それは「ヨハネの宝物」というべきイエスの唯一の教え「互いに愛し合いなさい」という教えであった。

教会の頭には、組織的存在と預言的（カリスマ的）存在の二つの役割が求められるが、ヨハネ伝では、ペトロは直接イエスを出会うのではなく、兄弟アンドレの紹介でイエスと関わりを持ち、イエスから三度「私を愛しているか」と問われている。

さらにイエスはペトロに「若かった時には自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわすが、年をとってからは、自分の手をのばすことになり、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所

へ連れて行くであろう」と言われた。ペトロの最期を述べたこの言葉を、カラヴァッジョは『聖ペトロの磔刑』で表現し、3人の人物は刑を執行するというより、ペトロを支えようとしているようにも見える。

『ダマスカスへの途中での回心』の絵は、パウロの回心というより、イエスがパウロに現れた瞬間をとらえている。大きく描かれた馬の脚がパウロを踏もうとする瞬間を、神が止めさせようとしているようでもあり、これから主にふさわしい器となるパウロの前途を表現しているとのことでした。



『聖ペトロの磔刑』(1601年) サンタ・マリア・デル・ポポロ教会チエラージ礼拝堂(ローマ)



『ダマスカスへの途中での回心』(1601年) サンタ・マリア・テル・ボボロ教会(ローマ)